

「音のない3・11」映像に

耳が聞こえないろう者の生活をテーマにした映像作品を発表している名古屋市緑区の今村彩子(あやこ)さん(32)が、東日本大震災で被災したろう者を取り上げたドキュメンタリー映画の制作を進めている。自らもろう者の今村さんは「被災地のろう者が抱える問題や苦勞などを伝えたい」。発生から1年を迎える11日も、被災地でカメラを構える。

大震災1年

今村さんは、母校の愛知教育大(愛知県刈谷市)で講演会の打ち合わせ中、これまでに経験したことのない揺れを感じた。しばらくすると、テレビに被災地の惨状が次々映し出された。「たくさんいる者がいるはずだ」。発生から11日後には、宮城県へ向かった。

最初に訪れたのは、仙台市から南へ約20キロの岩沼市だった。海岸近くの住宅約2000棟が津波で流され、死者・行方不明者は約180人に上った。宮城県ろうあ協会の案内で、被災した5人のろう者を訪ね、避難所などを回った。

70歳の女性は津波で家を流され、姉夫婦を亡くした。土台だけが残ったわが



津波の被害を受けた海岸近くを撮影する今村さん(昨年3月、宮城県岩沼市)。「目で聴くテレビ」提供

ろう者・今村さん 苦勞、情報格差伝えたい



今村彩子さん

家を見つめながら涙ぐむ女性の姿を撮影するかどうか迷ったが、了解を得たうえでカメラに収めた。昨年12月に再び訪れると、女性は「夫も入院しており、一人で寂しい」。ゆっくりと手を動かし、自分の気持ちを話してくれた。この女性とはその後メールや手紙で連絡を取り合っている。

岩沼市を始め、その後何度も被災地へ足を運んだ。福島県いわき市で出会った80歳の女性は、「原発事故を伝えるテレビのニュースには、ほとんど字幕や手話通訳がなく、内容を理解できなかった」と振り返った。宮城県内の仮設住宅で暮らす女性は「行商が来ても聞こえないから、魚が欲しいと思っても買えない」と不満げな表情を見せた。

ろう者の置かれた状況を収めた映像は、聴覚障害者向けのCS(通信衛星)放送

「目で聴くテレビ」で放映してきた。撮りためた映像は約20時間分ある。さらに1年を迎えた被災者の思いを取材し、1本のドキュメンタリー映画に編集する。

今村さんは生まれつき耳が聞こえない。音のない世界で過ごしてきたが、小学生の時、父親が借りた映画「E・F」のビデオを見て感動した。音が聞こえない人も感動させることができる映像の魅力にとりつかれ、映画監督を志し、米カリフォルニア州州立大ノースリッジ校で映画制作を学んだ。「同じろう者の立場から、ろう者が困っていること、求めていることを、映像を通して社会に伝えたい」。今村さんが映像作家を目指すのも一つの理由だ。東日本大震災では、ろう者と健常者の間に情報格差があることを改めて知った。「避難所に手話が出来る人を配置したり、テレビ放送には必ず手話通訳や字幕を付けたりしてほしい」と思っているろう者は多い。行政や関係団体などに働きかけていきたい。

ドキュメンタリー映画の完成時期や公開時期は未定だが、タイトルは「音のない3・11」と決めている。